

# 小平市における青年集団の役割とその変遷

—戦中・戦後初期を中心として—

大山宏<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科博士課程

本稿の目的は、青年集団と地域社会のかかわり方の変遷を検討することである。東京都小平市を事例として検討した結果、地域の文脈の中に埋め込まれたものとして存在していた青年集団が、趣味・娯楽的な活動を行うものとして青年自身や地域社会から認識され、仲間づくりを通して青年に対して教育的な働きかけをする集団へと変化していく過程が確認された。ここから、青年集団の教育的意義が、地域社会との関わりの中で変化してきていることが示唆される。

キーワード：青年集団，青年団，青年学級，地域社会

## 目次

### 1 はじめに

### 2 小平の歴史的背景

- 2.1 小平の成り立ち
- 2.2 青年集団の前身

### 3 戦中期の青年集団

- 3.1 集落ごとの青年会の成立
- 3.2 小平村青年団の結成
- 3.3 分団の活動

### 4 戦後の青年集団の復興と衰退

- 4.1 戦後の復興と地域の変化
- 4.2 小平町青年会と青年学級
- 4.3 青年学級の衰退

### 5 おわりに

## 1 はじめに

本稿の目的は、東京都小平市において青年による集団がどのように形成され展開してきたのかについて、1900年代初頭に青年と冠する集団が成立してから、太平洋戦争後（以後「戦後」と表記）に次第に衰退していくまでの、それぞれの時代背景を視野に入れながら検討することである。

青年団をはじめとする青年集団に関する歴史的研究は、これまで社会教育史だけでなく隣接する他領域においても進められてきた。その際、一般的に青年集団の歴史の変遷については、江戸時代以前の村落にあった若連中、若者組等と呼称される年齢階梯集団（以後「若者組」に統一）をその原初的形態とし、明治期以降に青年団として組織されていったものとして理解されている。また、青年団という組織が成立してからも、その創設期である明治期、全国組織化が進められるとともにそれに対する自主化運動が進められた大正期、ファシズムが進出しイデオロギーの問題が表面化した昭和期と、時期によって様々な課題が見いだされ、研究の対象とされてきた<sup>1)</sup>。こうした一連の研究が青年団史として総括され得るのは、青年集団が地域社会における青年の人格形成を担うものにとらえられてきたためである<sup>2)</sup>。

現代においても若者・青年の居場所に関する取り組みを若者組や青年団の系譜に連なるものと

して位置づけることがあるのは<sup>3</sup>、こうした人格形成の機能に着目したことによるものであろう。高橋勝は他者との関わりの中で「古い自己」の解体と「新しい自己」の再生が進行するきっかけを生む場のことを「自己形成空間」と呼ぶが<sup>4</sup>、青年集団はそこでの活動や学習を通じて青年が人格を形成する場であり、まさに自己形成空間として注目されていたといえる。

しかし、青年集団における人格形成のプロセスについて、及び人格形成の母体としての青年集団の変化・発展については、これまでの研究であまり触れられてこなかったところであり、青年教育研究の課題として指摘される場所である<sup>5</sup>。先述の通り青年集団に対しては時期ごとに異なる課題が見いだされており<sup>6</sup>、組織の法的な位置づけや制度も大きく変化してきたことから、一概に青年集団といっても青年に与える影響の在り方は様々に異なっていたと考えられる。また、青年が自己を組み換え新しい自己へと更新していく過程が、青年自身が長期的なライフサイクルの展望を持っているかどうかによって異なっていることを指摘する研究もあり<sup>7</sup>、形式的な集団の形態だけでなく、青年自身の持つ人生観等が大きく影響していることも示唆されている。

したがって、青年が集団の中でどのように人格形成をしてきたのかにアプローチするためには、青年自身が多様な活動をする中で何を感じ取っていたのかを、彼らの生活上の価値観と関連するものとして描き出していかなければならないであろう。そしてそれは、他者との交流の中で徐々に織りなされる意味空間<sup>8</sup>として青年集団をとらえることでもある。こうした観点から青年集団史をとらえかえすならば、青年集団という場にどのような関係が集積し、それによってその場にどのような意味が付与されたのかに着目し、その変遷を追っていくことが求められることとなる。そしてそれは青年集団での経験を通して人格を形成された大人像の変遷を追うことにもつながると考えられる。

その際に目を向けるべき対象は多岐にわたるが、主たる対象が青年自身の集団に対する主観的な位置づけや、青年同士の関わりにあることは疑いようがない。しかし青年集団に対する教育的視点について、そうした集団が本来成立した時代・地域の文脈から切り離され、抽象化・美化されていったとする見解もあり、地域的な文脈の中で

のように存在し成立し得ていたのかを問うことで、そこで行われる教育的活動の内実を検討することの重要性が指摘されるところである<sup>9</sup>。

そしてそのためには、地域で生活を営む一個人としてとらえる地域住民と青年集団の関わりに着目し、そこから青年がどのような影響を受けていたのかという教育学的視点に問い返す必要がある。これは、青年集団は地域に居住する青年によって構成されているがゆえに、地域のあり方に大きく影響されていると考えられるためである。例えば佐藤<sup>10</sup>は若者組について、村落共同体の維持存続に深く結び付くものであり、伝統的な行動様式の枠内での自由が確保されていたことを指摘しているが、これは青年集団が自治的・自主的でなかったことを意味するというよりも、青年集団をとりまく社会的な諸条件の影響の中で、青年たちなりの自治を行っていたと解釈するべきであろう。言い換えれば青年集団に対し青年自身がどのような認識を持ち得るかに、青年以外の地域住民との関わり方が大きく影響していたことが示唆されている。

青年集団は時に地域の中で役割を担い、一定の責任を果たしながら、地域社会との結びつきの中で維持されてきたのであり、青年たちの自己形成過程にも、地域との関わり方が影響していたと考えられる。こうした観点から、地域における青年集団の位置づけを検討することは、青年たちが集団を通じて自己の人格をどのように形成していったのかを明らかにするために不可欠なことだといえる。青年集団を青年だけでなく広く地域住民と関わる集団としてとらえることで、はじめて青年自身の自己形成のプロセスへと目を向けることができるのだと考えられる。

しかし、こうした青年集団の具体的諸相について、特定の地域社会との関わりの中で記述した研究は多くはなく、既存の研究に対しても地域的な偏在が指摘されるところである<sup>11</sup>。全国的な展開過程については研究者のみならず、日本青年団協議会等の記録が残されているが<sup>12</sup>、特定の地域に着目し、青年が地域社会との関わりの中でどのように活動し、何を感じていたのかという視点から青年集団の変遷に言及した研究は、青年団自主化運動に関して長野県下伊那郡を事例としたものをはじめとし<sup>13</sup>、いくつか散見されるものの、その数は多くはない。

そこで本稿では東京都小平市を対象とし、青年

の自己形成に関わる諸相として、青年集団が地域社会とどのような関係を構築してきたか、そして青年自身にとっての青年集団の位置づけはどのように変遷してきたのかについて検討する。小平は、明治初期から戦後の高度経済成長期にかけて、国家的な動向の影響を受け地域社会が大きく変動した地域であり、青年集団もそれによって急変してきた地域だと考えられる。小平市を含めた北多摩郡は、東京に最も近い農村地域の一つであり、甲州街道や青梅街道が通っていて交通の便も比較的良い地域であったことから、中央政府の情報も比較的入手しやすい環境にあったと考えられる。実際に明治期には自由民権運動の影響を受け、一部の青年が政治活動を活発に展開するなど、東京の動向に大きな影響を受けていることがうかがわれ、また戦後には都営団地の建設や工場の誘致によって、短期間で都市化・工業化を成し遂げた地域でもある。中でも小平は青梅街道が市の中心に通っていることや、都営団地が最初に建設された地域であること等、東京の影響を大きく受け戦後ベッドタウン化していった、典型的な都市近郊農村地域であったと考えられるのである。

本稿の第2章では小平で青年と呼称される存在による集団が形成されるまでの過程について検討する。小平で青年による集団が形成されるのは1901年の回田青年会からとされるが、回田青年会の結成やその後の取り組みの背景には小平という地域の特性があり、また前史として位置づけられる青年の取り組みがある。それらに関する記述の検討を通し、回田青年会以後の青年集団が成立する基盤となった事象について考察する。

第3章では青年集団が立ち上がって以後、戦時中に青年集団が一度断絶するまでの取り組みについて検討する。この時期には青年団に対し、国家的な統制が進められているが、一方で地域では政府の意図とは違う論理で青年団が運営されていたとされる<sup>14</sup>。特に集落での活動を継続していた分団・支部と称される青年集団では、変わらずに生活と結びついた取り組みを行っていたとされる。本稿では分団の取り組みにも着目しつつ、実際に集落で生活する青年たちにとって、青年集団はどのように機能していたのかを考察する。

第4章では戦後の青年集団の復興と衰退の過程について、小平市の急速な都市化と併せ考察を行う。特に都営団地の建設と工場の誘致によって、戦後20年ほどで小平は大きく変わったといわれ、

青年集団もそうした社会の変化の影響を受け、1960年代までに急激に変化・衰退していったとされる。この過程について、戦後農業青年が主体となって立ち上げられた小平町青年会と、青年会と密接な関わりを持って運営されていた青年学級を事例に検討する。

## 2 小平の歴史的背景

### 2.1 小平の成り立ち

小平市の歴史を取りまとめた『小平市史』によれば、現在の小平市を構成するのは、近世に開発された七つの新田村である(図1)。中でも小川村は、1656年に岸村(現武蔵村山市)の豪農小川九郎兵衛によって開発された村で、七つの村の中でも最初に開拓された村である。他の六か村は全て享保の新田開発制作によって開かれた村であり、小川新田、鈴木新田、野中新田(さらに善左衛門組と与右衛門組の二地域に分かれる)、大沼田新田、回田新田と呼ばれる。この七つの村が、戦時中に至るまでの様々な活動の基盤となっている。

1868年に天領地(幕府の直轄地)が県に再編される際には、小川村・小川新田・野中新田善左衛門組・回田新田は蕪山県に、その他の新田は品川県に編入され、1871年から1872年にかけて、廃藩置県によって再度編成された際に全ての集落が神奈川県第十一大区へと編入された。しかし、ここでも大沼田新田、野中新田の二地区、鈴木新田は一小区に、その他の集落は九小区に編入されている。そして1889年、市制町村制の制定によって、七か村を集めて小平村が誕生したが、開拓の経緯や中心人物の出身が集落ごとに異なることや<sup>15</sup>、明治期以後の行政区画の再編成の際に、大きく二つの異なるグループに分けて扱われてきたことから、小平村としての仲間意識というものには育ちにくかったのではないだろうか。後述するが、小平では青年集団の地域割拠性が近隣の村に比べて高く、たとえば青年団が小平村青年団としてまとめられてからも、各集落単位の分団の活動が活発であったことが記録に残されている。こうした地域割拠性の高さは、各集落がそれぞれ別個に発展してきたという歴史的経緯と無縁では

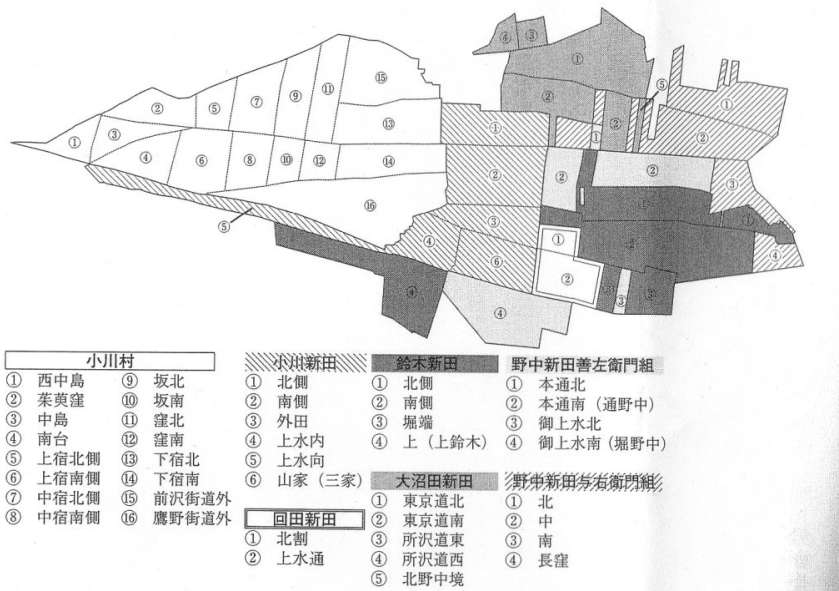


図1 近世小平概略図 (『小平市史 近現代編』 p.27 より)

ないだろう。

また、小平をはじめとする北多摩郡一体の新田地域には、武蔵野新田意識<sup>16</sup>と称される自己認識の形式があり、これを論拠として度々中央政府(幕府・明治政府)と交渉を行っていたことも、地域の特徴と言ってよいであろう。もともと江戸時代から、開拓と耕作を同時に行わなければならなかった新田地域の農民たちは生活が苦しく、食料の拝借や減税を求めて幕府との争いを繰り返してきた背景がある。こうしたやり取りは明治期以後も繰り返されており、品川県があらたに設立した社会制度<sup>17</sup>に対し、江戸時代には設けられていた、地域の成り立ちや生産力に応じた免除・保護制度が考慮されていなかったために、小平を中心とした村々が大規模な反対運動を起こした御門訴事件や、地租改正と平行して増租のために行われた地価の修正に対する地価修正反対運動等がそれにあたる。いずれの事例でも小平の集落は中心的な役割を果たし、またその際に論拠として用いられたのが、単に新田であるというだけでなく、享保期に開発された武蔵野新田であるという主張、つまり武蔵野新田意識であった。

こうしたやり取りを通じ、自らの生活の必要に応じて、中央政府と相対するという意識は、小平においては強固に形成されていたと考えること

ができる。

## 2.2 青年集団の前身

若者組は基本的に村落ごとに結成され、一定の年齢に達した村の若者は全員が加入するものとされていた場合が多い。その具体的な活動内容は地区によって異なるものの、祭りの神輿担ぎや、夫役を担当するような村人足等、集落にとって不可欠な役割を担っていた他、結婚相手を探す場としての婚姻媒介機能を備えているところも多かったとされる。また、集落における若者組の役割は、若い労働力を集約し生産力を維持することと、青年たちに共同体の価値体系やそれへの忠誠心を植え付けることであった<sup>18</sup>。

小平の各集落にも、もともと「若衆」または「若者組」と呼ばれる集まりがあり、15歳になると酒一升を持って仲間入りをしたとされる<sup>19</sup>。しかし、若者が集まり寝食を共にするような「宿」の制度はなく、組織としての結びつきも弱いものであった。活動の内容としては祭礼の際に中心となって働くという程度であり、結婚その他の日常生活に関する事柄に若者の組織が干渉するようなことはなかったとのことで、祭礼をはじめとして村の生活の中で若者の力が必要となった際に動くためのものであり、集落の生活を維持するため

の集団として位置づけられていたと考えられる。小平における若者組は、若い労働力の集約を主な機能としていたと考えられる。

こうした若者組は明治期に入ると衰退していったとされるが、これはそれまで集落の生活の一部として位置づけられ、決められたルートに従っていれば原則的に全ての課題が解決され、自然と大人社会の仲間入りができていたものが、伝統的な村落体制への危機によってそのルートが不安定になったことで青年の不安や動揺という危機的状况につながったことによるものと解釈できる<sup>20</sup>。

一方で、小平では「青年」と呼ばれる存在による組織が成立する際に大きな影響を与えたと考えられるのが、北多摩郡で活動していた「壮士」と呼ばれる集団である。「壮士」について、『小平市史 近現代編』では“生業を離れ、自らの危険を顧みずに国事に奔走する青年活動家のこと”として言及しているが<sup>21</sup>、こうした表現からは壮士の活動は集落内での生活とは切り離されたものであり、祭礼等に関わっていた若者組とは異なる性質を持つ集団であったといえる。実際に壮士の取り組みは国政を念頭に置き、小平だけでなく北多摩郡一帯の壮士たちが集まって行われていたものであった。

北多摩における壮士の活動は 1870 年代後半から確認されており、この頃に東京の知識人グループである都市民権派の影響が北多摩郡に浸透し、民権運動が活発化したことが影響しているとされる<sup>22</sup>。これは壮士の活動が自由民権運動に強く影響されたものであり、極めて政治色の強いものであったことを示しており、後に「小川諸氏」と称された小平の壮士にも当てはまる特徴である。この時期に、壮士の活動によって「神奈川県倶楽部」や「北多摩郡倶楽部」といった団体が多数結成されている他、神奈川県議会議員にも壮士といわれた集団から議員を輩出している等、壮士の政治活動は活発に行われており<sup>23</sup>、その影響力は大きかったと考えられる。

こうした一連の取り組みの中で 1892 年に結成されたのが「正義青年会」であり、この団体は北多摩郡の壮士の活動拠点として結成されたものとされる。その会則によると、目的は“会員相互に交通親愛して青年の智徳を上進せしむる”こととされている<sup>24</sup>。本部は小平村に設置され、会員数も全体で 155 名のうち小平村のものが 69 名を

占め、最も多かった<sup>25</sup>ことから、この当時は小平村の壮士は、壮士集団の中で一定の影響力を持っていたことがうかがえる。

ただし、壮士の取り組みがそのまま後の青年に継承されていったわけではない。むしろ壮士は青年と対置され、壮士と青年の間で青年期をむかえた者たちを二分するヘゲモニー上の闘争が生じていたことも指摘されており<sup>26</sup>、青年にとっては全く異なる行動様式を内面化した相容れない存在でもあった。しかし同時に、壮士の取り組みは青年にとって無視し得ないものでもあり、当時の青年期の者たちが“「壮士」的实践と「青年」的实践という、ひとつの体系として構造化された、圧倒的に有力なこれら二様の対立し合う実践の体系のあいだを揺れ動いていた”のだととらえるならば<sup>27</sup>、壮士の実践といかに向き合うかは青年にとって不可避の課題であったといえる。

小平では青年よりも先に壮士が活動を開始したため、後発の青年にとって、壮士の取り組みは無視し得ず、その意味で小平の青年集団に大きな影響を与えていたと考えられる。

### 3 戦中期の青年集団

#### 3.1 集落ごとの青年会の成立

小平に居住する青年によって結成された集団として最初に記録に残されているのは、1901 年に結成された回田青年会である。これは当時の小平村の中の一集落である回田新田の青年たちにより結成された団体であり、壮士と呼ばれる一部の青年によって組織されたものではなく、回田新田に居住する 15 歳から 35 歳までの男子全員を構成員として位置づけた点で、正義青年会とは異なる性格を持つ団体であったと考えられる<sup>28</sup>。回田青年会の会則を見ると、構成員に関する規定では、原案ではあった「有志ノ」という言葉が削除された跡が認められ、当初は正義青年会のように一部の青年で結成しようとしていたものが、結成に向けた議論の中で方針を変えていったことがうかがえる<sup>29</sup>。当時の議論の内容は記録に残っていないが、回田青年会が正義青年会を強く意識しながら、それとは異なる方向性で青年をまとめようとしていたのではないかと考えられる。

回田青年会と正義青年会の違いについては、そ

それぞれの団体の目的からも言及される。回田青年会会則第1条では会の目的として“会員間常ニ親睦ニシテ相互ノ智識ヲ交換シ智力ノ発達ヲ謀ルヲ以テ目的トス”と記されているが<sup>30</sup>、これは“会員相互に交通信愛して青年の智徳を上进せしむる”とした正義青年会の目的<sup>31</sup>から、政治性が強かった「徳」を削り、「知識」を学ぶことを重視したことによると考えられている<sup>32</sup>。また具体的な事業として、回田青年会会則では講習会や夜学会の実施に言及しており、学習活動を主要な目的に据えていたことから、特に初期の回田青年会においては、青年の修養のための組織という性格が色濃く出ていたことがわかる。活動内容はこの後増やされていき、1915年の会則改正によって「兵員の待遇」「産業の振興」「公共事業の帮助」といった事業が主な活動として定められた他、「青年会会議録」からは「道路標識杭設置」「野鼠駆除」といった取り組みも行っていたことがわかっている<sup>33</sup>。一方で「青年会会議録」で扱われている議題を見ると、会則の変更や桑園の管理に関するもの等が話し合わせている一方で、講習会や夜学会に関するものは見当たらない。このことから、回田青年会は当初は青年の修養を主な目的としていたものの、次第に集落の生活に直接的に結びつく活動が中心になってきたことがわかる。これらの活動内容からは青年会の取り組みが村の生活に密着したものとなっており、次第に村を支える組織として位置づけられるようになっていったことがうかがえる。一部の青年層による政治性が強い活動の拠点としての意味合いが大きかった正義青年会に対し、回田青年会は地域の全青年を対象としながら、村の生活に密接に関係した学習活動を志向し、次第に村の中で認められる存在となっていくのであろう。

こうした集落単位で設置された青年会は、回田新田だけでなく、小平村の各集落で設置されるようになっていった。1915年の記録では、小平村の中に九つの青年会が確認される<sup>34</sup>。また、主要な事業としてそれぞれに桑園の設置や道路の修繕等に言及しており、いずれの青年会も生産活動への貢献を主要な目的としていたことがわかる。

集落単位の集団である若者組が青年団(会)へと再編成される動きは、“伝統的な村落体制の危機が青年自身によって意識され、自己の集団を新しい組織原理のもとで再組織しようとしたもの”であり<sup>35</sup>、若者組の持っていた社会的機能の喪失

と、それによって自堕落な風潮が生じたことに対し、危機感を持った青年自身が声をあげたことによるものであると、一般的には理解されている<sup>36</sup>。

しかし、小平の事例では、集落単位の青年集団である回田青年会が設立された際に意識されていたのは、集落での青年の役割の喪失ではなかったと考えられる。むしろ重要であったのは、地域を離れ政治的な活動を展開していた正義青年会を意識しつつ、その政治性から距離を置こうとする姿勢であった。また集落の中で活動を続けることで、当初は修養を意識していた集団が、次第に集落の生活様式の中に位置づけられていったのではないだろうか。この時期の青年が何を考え、感じ取っていたのかを示す直接の記録はないものの、各集落で設置された青年会の主な活動内容を見る限り、青年会の活動が集落全体の生産活動の中に位置づけられるものであったことは間違いなく、青年会は若い労働力を集約する機能を果たしていたことがうかがえる。

### 3.2 小平村青年団の結成

先述の通り、小平は一つの村となる以前は七つの集落で構成されており、それぞれに開墾の契機が異なることもあって、地域割拠性が高かったと言われる。集落ごとに設置された青年会もその影響を受け、地域ごとに動き連携が取れていなかったことから、青年会の内部からこれをまとめようという意見が起り、“当小平村ノ如ク大字及小字等ニ多数ノ青年会ノアル土地ハ皆合同一致シテ一町村ハ一ノ青年会トナシ必要ニ応シテ各所ニ支部ヲ設クル事”という提案が小川新田青年会から提出されている<sup>37</sup>。これにより1918年に村の青年をまとめる小平青年会が設立されるとともに、各集落の青年会は小平村青年会の分会・分団として活動することとなる。このとき、記録によれば各集落の青年会役員が小平村小学校に集まり、青年会統一について協議を行ったうえで、各字の青年会でも議論を行い、青年会統一の合意形成を行ったことが記されている。また、統一にあたっては小平村小学校長が小平村青年会の会長に選出されている<sup>38</sup>。

さらに1927年には小平村青年団として改称し、規約の改正も行われた。これにより村長が小平村青年団長を兼務することとなり、15歳から30歳までであった会員年齢も、国から推奨された15

歳から 25 歳までに変更している。また新たに国家的要請をうけ、“青年ヲシテ真ニ国家将来ノ運命ヲ担フニ足ルヘキ者”を育成することを目標としてかかっている<sup>39</sup>。

日露戦争後の青年団指導において、政府が町村本位の青年団組織化を原則としていたという指摘があるが<sup>40</sup>、記録を見る限り小平において村全域の青年集団を結成する契機となったのは、青年自身からの発議によるものとされる。しかし、実際には集落単位で生活を営んでいた当時の状況を鑑みるに、青年自身から統一への意欲が生じるとは考えにくく、統一青年会発足までの記録の中に“北多摩郡役所ヨリ海江田郡視学出張セラレ青年会統一ノ件ニ付キ有益ナル講話アリ”とあることから<sup>41</sup>、行政的に何らかの形で働きかけがあったと考えられる。

その後国家的要請を受けて会員の年齢や集団の目標を設定した点も含めれば、小平村全域の青年団を結成するに至るこうした一連の動きは、それまで青年が自分たちの生活を基盤としながら主体的に進めてきた青年団の取り組みが、国民形成という国家的な方針の中に位置づけられていったものと解釈し得るであろう。実際に集会の動員や募金などの取り組みは、大日本聯合青年団を頂点とした上意下達の連絡によって為されていたとされる<sup>42</sup>。

しかし一方で、こうした国家主義的なイデオロギーが青年団に受容される過程を、統制側の論理と受容側の論理にズレが生じながらも表面上は機能している状態としての「擬制」ととらえ、青年団を擬制的に結合したものとみなす見解も存在している<sup>43</sup>。国家主義的な価値観が入ってきた中で、青年はそれとどのように折り合いをつけながら活動を続けてきたのかが問われているのである。そしてその際に注目されるのが、青年が実質的な活動の場としていた青年団の分団・支部の取り組みである。

### 3.3 分団の活動

小平に居住する青年にとって、村の青年団よりも分団や支部の活動の方が生活に密着したものであったことは、青年団経験者の手記によって確認されるところである。1930年に青年団に入団した男性による記録『青年訓練所時代のことなど』によれば、小平村青年団は本部・分団・支部

に分かれて活動しており、主だった活動は支部単位で行っていたとされる<sup>44</sup>。また、小平村青年団ができた後も、野中新田地区に「誠心会」という青年団が存在していたことに言及する記述も残されている<sup>45</sup>。この「誠心会」が小平村青年団の分団や支部にあたるものかどうかは定かではないが、集落単位で活動している青年たちは、変わらず集落単位での活動の基盤を維持していたことがうかがえる。具体的な活動内容として言及されているのは輪読会・野鼠駆除・ぬまあげ（排水路の清掃）・桑園の運営・除雪作業などであり<sup>46</sup>、集落単位で活動する青年会であったときから大きな変化は見られない。

まず、分団・支部がどのような集団であったかを知るために、その制度的基礎となる団員の年齢規定と団長（支部長）の選出規定について<sup>47</sup>、資料が残されている小平村青年団第四分団を事例に検討する。1935年に改正された、小平村青年団第四分団々則<sup>48</sup>によれば、団員は正団員、准団員、特別団員、名誉団員に分類される。正団員が満15歳から満25歳までの者とされているのに対し、准団員は“次男三男ニシテ定年ニ有ル者”とされており<sup>49</sup>、長男と次男以下で分団内の扱いが違っている。総会は正団員によって行われることも定められているため<sup>50</sup>、次男以降には議決権が与えられていなかったことがわかる。また、特別団員は26歳から35歳までの分団幹事経験者、名誉団員は26歳から45歳までの本団最高役員経験者と分団最高役員経験者とされている。

また、役員に関する規定に目を向けると、この分団には本団最高役員一名、分団長一名、副分団長二名、庶務部長一名、事業部長一名、修業部長一名、幹事長一名、幹事七名が役員として設置されている<sup>51</sup>。またその選出方法としては、分団長は正団員の中から役員によって推薦され、名誉団員と本人の承認によって決定されることとなっている<sup>52</sup>。先述の通り小平村青年団の団長は村長が兼任していたが、分団では団長を青年自身が務めていたことがわかる。

これらの規定から、小平村の青年団分団の性格として、以下のことがいえるのではないかと。まず一つ目として、長男と次男以下の団内の立ち位置が明確に区別されていたことがあげられる。これは分団が農家の後継ぎによって運営されていた組織であったことを示すものであり、国民形成という観点から青年全てを対象としていた国家主

義的な価値観とは異なり、集落の秩序を維持する家父長制の影響を強く受けていたことをうかがわせる。

二つ目が、特別団員と名誉団員が持つ指導者の性格である。他の地域の事例でも 25 歳を超えて青年団に所属する者のために特別団員という制度を用いたことが紹介されているが<sup>53</sup>、小平の事例では特別団員と名誉団員がともに青年団の役員経験者に限定されていることから、正団員・准団員に対する指導者としての性格が強かったのではないかと考えられる。特に分団長の選出の際に名誉団員の承認が必要であったこと等から、名誉団員は一定の発言権を有していたことがわかる。これらのことから、分団は上位者が下位者を指導するという年齢階梯的な構造の中で、青年が地域の価値観を内面化していく、教育機関としての側面も備えていたと考えられる。

また、実際に活動していた際に青年が何を考えていたのかについては、青年団経験者の手記からうかがい知ることができる。たとえば「ぬまあげ」に関する箇所、村役場の土木係のところに行く予算を組んでくれ、青年団の仕事に対し報酬が出ていたという記述があるが<sup>54</sup>、「仕事」といった表現が散見されるのが分団の取り組みに関する記述の特徴だといえるだろう。「ぬまあげ」の記述における村役場の職員とのやり取りや、雪かきによる子供の通学の安全確保等<sup>55</sup>、分団が「仕事」を通して地域の人々と交流し、貢献していた様子が記されている。

また、こうした青年の取り組みに対し、地域住民も積極的に支援をおこなっており、小平村青年団第四分団の資料にはある程度の資料が残されているが、その中には「衛生消毒費寄附金名簿」や「野鼠駆除奨励会寄附金芳名簿」「在満将兵慰問袋調製寄附者名簿」等、活動内容別に住民からの寄付を受けていた記録が残されている<sup>56</sup>。これはこうした分団の取り組みが村や集落にとって公共性の高い、不可欠なものだという認識が、当の青年も含め広く共有されていたことによるものであろう。

したがって、分団は日常的な活動の中で地域住民と交流し、その有用性を認められることで地域からの支援を受けながら運営されていたと考えられる。青年自身にとっても地域との関わりは強く意識されており、地域の生活を支える集団として自覚的に運営されていたのであろう。そしてま

た、そうした取り組みによって地域で生活するための価値観を青年が獲得していく場でもあり、そのために年齢階梯的な関わりが活用されていたと考えられる。

## 4 戦後の青年集団の復興と衰退

### 4.1 戦後の復興と地域の変化

小平では戦後ほぼ一貫して人口が増加傾向に向かったとされる。人口の推移を見ても、1945年には13,568人であったのが、1955年には29,175人、1965年には105,355人と、戦後20年で約8倍となっている<sup>57</sup>。『郷土こいだいら』によれば、こうした人口増加の大部分は小平外からの流入人口によるものであり、それも計画的な集団的導入を主体としていると指摘されている。中でも大きな影響を与えているのは、昭和20年代に行われた都営住宅の建設と、30年代における工場の進出である。

1945年に約2,300であった世帯数は、1954年には4,900世帯と、二倍以上になっているが、この増加数の33%は都営住宅入居世帯であった<sup>58</sup>。都営住宅は空襲による住宅難の解消のために政府が力を入れた政策であったが、小平が適地とされた理由として以下の六点があげられる。すなわち、①比較的都心に近い、②広大な農地と山林を有している、③農地改革によって手に入った土地がある、④20年代後半には、農作物の転換を考えねばならぬ情勢にあった、⑤地価が安い、⑥どの地点も駅から2キロ以上離れているところは小平にはない、という理由である<sup>59</sup>。

また、大工場が小平に進出した背景には、小平町の積極的な工場誘致の姿勢があったとされる<sup>60</sup>。1955年から小平町議会で工場誘致についての議論が始まり、当時の町長が企業と地主の間に入って交渉をまとめた記録も残っている<sup>61</sup>。こうした取り組みによって、1950年代後半を中心に様々な工場の誘致に成功しており、1958年の朝日新聞では「小平町の工場ブーム続く」という記事でその活況ぶりを伝えている<sup>62</sup>。工場の進出によって産業別人口も大きく変動しており、1950年には農業人口2,649人に対し製造業人口932人と、農業人口の方が3倍近かったのに比べ、1960年には農業人口1,747人に対し製造業人口5,216人



と逆転している<sup>63</sup>。当時人口は増加傾向にあったことも加味すれば、当時いかに農業離れが進んでいたかがわかる結果だといえるであろう。

## 4.2 小平町青年会と青年学級

戦時中に青年団組織が解体制度的に解体されたのは周知の通りであるが、多数の青年が軍に動員されたことで分団・支部においても団員の減少が進み、活動が維持できなくなったという例が報告されている<sup>64</sup>。小平においても同様に、召集で軍隊に行く青年が増えることで団員が減り、戦時中に既に活動ができなくなっていたという記述が残されている<sup>65</sup>。戦後になり復員で戻ってきた後も、青年団が自然消滅してしまっていたため、青年たちがあちらこちらにたむろしているだけとなり、そうした現状を危惧した農業会（現在の農業協同組合）会長の呼びかけで青年団復活に向けた動きが作られたのだという。その際に活用されたのが、戦前の青年学校の跡地であり、小平の青年学校は北多摩郡唯一の特設青年学校に指定されており、独立した校舎を持っていたため<sup>66</sup>、戦後すぐに青年学校校舎を利用し「小平町青年会」という名称で活動を始めることができたのである。

小平町青年会の会員は新制中学卒業から 25 歳までの男女であり、活動内容としては公共奉仕・スポーツ・レクリエーション・討論会・臨海学級等があげられている<sup>67</sup>。また、発足当初は町内の他の団体とも連携を密にとっていたので、1950 年頃から公民館と共催でスクエアダンスやリーダーシップ講習会の企画を行っている他、1951 年に始まった町民祭の実行委員の主要関係団体にも青年会が名を連ねている<sup>68</sup>。当時活動をしてきた人による記録でも、素人演芸会や運動会を盛大に行ったと記載されており<sup>69</sup>、小平村青年団の時期に比べレクリエーション的な取り組みが多くなっていることがうかがえる。1956 年には、読売新聞の紙面で「“お祭り青年団” 返上へ」という記事が載せられ、三多摩青年団体連絡協議会の場で読書会、映画批評、コーラス会等に代表される学習活動の重視が提唱されたことが報じられているが<sup>70</sup>、小平に限らず実業からレクリエーションや学習活動への方針の転換が青年自身から提唱されていたことが読みとれる。こうした当時の青年団体にとって、青年学級との関わりは学

習活動の展開という目的に合致したものであったと考えられ、実際に青梅青年団から青年学級での学習活動について発表があり、“青年団と青年学級は表裏一体でなければならぬと結論” したことも言及されている<sup>71</sup>。

小平町青年会にとっても青年学級との関わりは重要なものであり、運営に対しても大きな影響力を持っていたとされる。青年学級は 1953 年の青年学級振興法により、市町村が開設することで始められた制度ではあるが、小平では 1954 年の開設の際に、青年の自主性を重視するという名目のもと、15 人以上の青年が集まって町教育委員会に申請すれば、青年を含めた運営委員会の審議を経て青年学級として講座を開設することができるという仕組みをとり、青年会からの希望で複数の講座が開設されている。これをうけ 1955 年度の青年学級からは青年会の分会というまとまりにより地区単位で開設されるようになったが、このときはまだ野中地区の青年学級で 1956 年度に農業コースを開講し、農産物の育成調査や簿記による農家経営の研究などを行ったという記録が残っているなど<sup>72</sup>、生活の課題に関する取り組みも多く取り扱われていた。また、当時の参加者の 7 割が農家出身であり、講師もほとんどが教員や役場職員などであった<sup>73</sup>。

しかし青年会の申請による青年学級の運営は、青年会の弱体化によって継続ができない状況となり、数年で終わることとなる<sup>74</sup>。青年会自体も衰退を続けていくこととなり、小平公民館による青年実態調査の報告書では、1961 年頃から小平市青年会も衰退の一途をたどっており、報告書が書かれた 1969 年の時点でほとんどその組織の存在すらみられなくなっていることに言及されている<sup>75</sup>。農家の生活様式を基盤に発展した小平町青年会の衰退は、急速に都市化が進行した小平市の発展と時期を同じくしており、1950 年代以降農業人口が急激に減少したことと無関係ではないであろう。こうした変化について、1959 年に発刊された「小平町誌」では、端的に以下のように記述されている。

最近は部落間の対立意識もなくなり、旧村地域だけでなく、都営住宅などの転入地域の青年とも提携するようになってきた。しかし、会員の職業も様々であり、東京方面への通勤者もかなり多くなってきて、会員の生活の共

通の基盤となる要素が失われつつあるので、会としての性格や活動方針をどこに置くべきかという点で、統一を求めることがむずかしく、今後に残された問題は大きい<sup>76</sup>。

小平町青年会は、戦中期まで活動を続けていた青年団と同様に、農業に基盤を置いた価値体系に依拠した集団であったといえる。農業会の呼びかけで結成されていることから、青年会のメンバーが農業に携わる青年が中心となっていたことが推測される他、青年会が関わって運営された青年学級のテーマが農家の生活課題と密接に関わるものであり、参加者も大半が農家出身者であったという記録が残っていることから、青年会が“生活の共通の基盤”である農業に依拠しながら活動をしていたことがうかがえる。したがって、他の地域からの転入者が増え、就業形態が多様化したことが、青年会に方針の転換を迫ることとなったのであろう。青年会の衰退は、こうした要請に応えることができなかったことによるものと考えられる。

### 4.3 青年学級の衰退

青年会が青年学級の運営に直接関わらなくなるのと前後し、青年学級の目的も少しずつ変わっていき、次第に仲間づくりが重視されるようになっていく。1953年の町報では「生活に直結する青年学級」と題し、青年自身の希望と関心に基づいて学習内容が決定されることに言及している<sup>77</sup>。この時点では仲間づくりという言葉は見られず、あくまでも学習内容を決定する過程に青年の意思を反映させていることを重視しているといえる。しかし1958年度に発行された青年学級記念文集『ともしび』第1号の作成が仲間づくりに役立っていたという記録がある他<sup>78</sup>、1962年度発行の『ともしび』第5号では青年学級の目的として“働く若者たちの憩の場、学習の場、仲間づくりの場”と記載されており<sup>79</sup>、この時には仲間づくりが青年学級の主要な目的の一つとなっていたことがわかる。

こうした変化の原因について端的に記述しているのが、1963年度発行の『ともしび』第6号に当時の公民館長が寄せた文章である。そこでは小平の青年学級の大きな特色は学ぶことを通しての仲間づくりであるとし、勤め先を基盤として

仲間が成り立っている都市の状態では、ベッドタウンでは人間関係が構築されないことを課題として言及している。そして“職域の上に立つのでもなく、単に居住地を基盤とするのでもなく、学ぶという精神を基盤としながら居住地を基盤としているという点で、青年学級の仲間作りは、従来の都市を新しい血のかよった社会によみがえさせる一つの方向”なのだ<sup>80</sup>と論じている。こうした記述からは、都市化・ベッドタウン化が急速に進行する中、それまでであった他者とのつながりが断たれていくことに対する課題意識を見て取ることができる。

青年学級の目的の変化とほぼ同時に、青年学級の運営方法も大きく変わっていくこととなる。青年会に関わらなくなったことにはすでに言及したが、その後1958年度からの青年学級では公民館の職務権限による講座の開設で、青年に好きな科目を選択して参加してもらうというメニュー方式が始まり<sup>81</sup>、講座の内容も趣味や教養関係の講座が中心となっていく。青年学級の開設講座の記録を見ると、1959年度には6つの講座が開講されているが、その内容は生花・手芸・カメラ・謄写印刷・社会時事・音楽となっている。その後1960年度は10講座、1961年度は前期10講座、後期11講座、1962年度は前期14講座、後期11講座が開講されるなど、1960年代前半までは青年学級は活発に展開されていたが<sup>82</sup>、講座の内容に大きな変動はない。

一方で、青年学級に集まる青年の質にも、1960年頃から変化が見られるようになったとされる。1960年度の青年学級生の記述によると、1958年頃の青年学級の参加者は多くが小平で生まれ育った「土地っ子」であったが、徐々に他地域から移り住んできた人が増えてきており、そうした人が「参加する科目には熱心だが、そのほかのことには関心を示さない」ために仲間づくりに熱心な「土地っ子」が青年学級から遠ざかっているとされている<sup>83</sup>。1963年度に発行された青年学級の機関紙『なかま』には、この年の特色として科目の内容が習いごとから教養、趣味的なことに重点が移ってきたこと、運営委員会の構成に土地っ子の委員が少なくなったこと等をあげており、参加者の傾向の変化として“それまで、青年会や地元出身とのつながりのある青年を主として形成された仲間集団は、次第に小平に移り住んだ参加者が増えた”ことに言及している<sup>84</sup>。

また、参加者の質の変化が指摘されるのと時期を同じくして、継続して青年学級に参加する人が減少していく傾向が見られる。青年学級に継続して参加する人は毎年およそ 50 名おり、「青年学級生族」と呼ばれていたとされるが<sup>85</sup>、1962 年度の青年学級の記録を見ると、参加者のうち複数年度にわたって継続して参加しているのは、1960 年度で 170 人、61 年度で 59 人、62 年度が 53 人となっている<sup>86</sup>。ただし 62 年度の 53 人のうち 22 人が 3 年生であるため、2 年生の人数は 31 人であり、前年度から継続して参加しようとする人は、この 3 年間の間に顕著に減少していることがわかる。また、1968 年の青年学級に関する記述では、青年学級生が毎年変わってしまい、複数年度にわたって学習を継続する青年が少ないため仲間づくりがうまくいかないことに言及されており<sup>87</sup>、60 年代を通して青年学級に継続的に参加する若者が減り続けていることがうかがえる。

この時期の青年の集団形成に関しては、農村の網羅的な青年組織から有志グループ型組織への変化としてとらえられるが<sup>88</sup>、小平の青年学級の変化もこうした文脈の中で解釈可能である。つまり、地域の変化と青年層の多様化によって集団への未加入者が増加したことで、地域に居住する青年を網羅的に組織することが難しくなり、青年の関心や意欲に依拠しながら集団を形成する必要が生じているのである。これは同時に、これまでの青年集団が維持していた、若手の労働力の集約という機能がうまく働かなくなったことを意味しており、その結果として地域社会との関わり方が変化していったと考えられる。青年学級受講生や、青年学級から派生したサークル活動の参加者を対象とした聞き取り調査の記録を見ると<sup>89</sup>、仕事による忙しさが参加できない理由として多く言及されていることがわかるが、これは地元の商店で働く青年であっても休みを合わせ仲間と活動する時間を捻出することが難しくなっていることを示している。かつては青年団の活動に対し地域住民が金銭的に支援を行っていたことを考えると、青年の活動に対する地域社会の見方が変化し、金銭等の直接的な支援だけでなく、青年が集団で活動を行うために必要な時間を捻出できるようにするような間接的な支援も行われなくなっていることがわかる。

また、こうした有志グループ型組織への転換によって、青年自身にとって青年集団が持つ意味合

いも大きく変化したと考えられる。先述のように、青年学級やサークル活動に参加できない理由として、仕事による忙しさに多く言及されている他、「学ぶ・勉強する」という活動の敷居の高さについても言及されており、遊びのように入りやすい雰囲気を作ることの重要性が、青年自身によって指摘されている<sup>90</sup>。これはかつて青年団の活動が「仕事」として不可欠のものと認識されていたことを考えると、青年自身の認識でも集団での活動が趣味・娯楽的なものにとらえられるように変化してきていたことを示している。またその一方で問題視されているのは、地域での友人の不在や仲間意識の欠如であり、多くの青年が青年学級やサークル活動に参加するまで、地域で友人と言える人がほとんどいなかった、仲間意識を感じたことはなかったと語っている。青年たちにとって、集団への参加は地域社会と結びつく不可欠なものではなく、仲間づくりという目的のために自由意思で参加するかどうかを決定するものとなっていたが、同時に途切れた仲間関係を新たな形で結び直すことで、地域社会を構築していく営みとしても認識されていたと考えられる。

## 5 おわりに

小平の青年集団と地域社会との関わり方は、ながらく農業に基盤を置いた“生活の共通の基盤<sup>91</sup>”を前提としていたと考えられる。戦前から戦中にかけての青年会・青年団の組織化も、集落内の若い労働力の集約を主な役割としていた若者組の機能を、当初は修養を主要な目的としていた青年会・青年団が次第に継承していく過程としてとらえることができる。また、共同体の内部で共有されていた価値体系を青年たちが内面化していくための教育機関としての側面も持ち合わせており、青年自身にとっては地域の先達からの指導を受けながら自身を地域に埋め込んでいく、年齢階梯的な集団として機能していたのであろう。分団の規約において長男と次男以降を明確に区別したこと等、他の地域に比しても小平の青年集団は地域共同体の価値体系を多分に内面化した存在であったと考えられる特徴を有している。

また、地域的な文脈においても、青年集団は地域の生活を支える貴重な労働力として認識されていたと考えられ、青年団による各種活動が地域

住民からの寄付金によって運営されていたという実態からも、青年団の取り組みに対する地域住民の期待がうかがえる。一方で、先行研究で指摘されるような、若者組の持っていた社会的機能の喪失によって青年の中に自堕落な風潮が生じたことが青年会結成につながったといった経緯は<sup>92</sup>、小平においては確認されなかった。

戦後の動向に関しては、地域の変化や青年の多様化によって青年集団の質が変化せざるを得なかったことで、地域社会における青年集団の位置づけも大きく変わっていったことが示された。むしろここにおいて表面化した問題としては、青年の友人関係の不足、言い換えれば青年の地域社会の中での孤立があげられるであろう。この時、青年集団の活動を「仕事」という不可欠なものとする認識は薄れ、これによって青年集団と地域社会との関わり方も大きく変化していると考えられる。地域住民からの活動への協力も少なくなり、小平町青年会が衰退した後は青年学級や青年によるサークルが主な集団となったことから、仲間づくりという目的によって教育行政が提供するものとなっており、より教育的な意図に則った人格形成が志向されるようになっていくことがわかる。

こうした小平の事例からは、青年集団が成立・維持される地域的な文脈が、地域社会の変容と時期を同じくして大きく変化していったことが示唆される。青年団の分団・支部に関する記述からは、この時期の青年集団が地域的な文脈に則って成立・維持されていたものであり、そのことが青年自身に強く意識されていたことがうかがえる。その一方で、戦後の青年学級・青年サークルでは仲間づくりが重視されるものの、それは青年自身が生計をたてるために行う労働とは切り離された、余暇的なものとして青年自身にも認識されていた。青年自身の記述における地域住民との関わり方や、地域からの活動への援助のあり方等からは、青年集団の地域社会における役割が、地域社会の中にある程度明確な“生活の共同の基盤”が存在し、その内面化を通して青年を地域社会に定着させていくというものから、地域社会の中で孤立し浮遊している青年同士を結び付けることで、人と人とのつながりが分断されがちな社会を再度結合させるためのものへと変化したことがうかがえるのである。

本稿では、東京都小平市を事例として、青年集

団と地域社会のかかわり方の変遷を検討した。その結果、地域の文脈の中に埋め込まれたものとして存在していた青年集団が、趣味・娯楽的な活動を行うものとして青年自身や地域社会から認識され、仲間づくりを通して青年に対して教育的な働きかけをする集団へと変化していく過程が確認されたといえる。ここから、青年集団の教育的意義が、地域社会との関わりの中で変化してきていることが示唆される。しかし、青年の自己形成の具体的なプロセスを解明するには至っておらず、各時期における青年の自己形成過程については、地域社会との関わり方を踏まえた上での更なる検討が必要となる。また、青年集団を対象とする際の地域的偏在についてはかねてから指摘される<sup>93</sup>、他の地域との比較を含め、小平という地域の特徴についてもさらに検討を加えることが求められる。

## 注

1 上野景三 “青年教育史研究の課題と展望—青年団史研究を中心に—”『日本教育史研究』第15号、1996、pp.111-130

2 *Ibid.*, p.111

3 久田邦明『子どもと若者の居場所』萌文社、2000

4 高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から』東信堂、2011

5 上野, *op. cit.*, pp.119-120

6 上野, *op. cit.*

7 藤井佳世 “子どもの物語／学校の物語—非定住の自己形成と多様化する学校” <高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から』東信堂、2011 > pp.160-193

8 高橋, *op. cit.*, p.24

9 安藤耕己 “(教育的)な「若者組」「子ども組」の成立—青年集団・子ども集団の歴史的原像をめぐる言説とフォークロリズム—” <日本社会教育学会編『日本の社会教育第52集 〈ローカルな知〉の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』東洋館出版、2008 > pp.145-156

10 佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房、1970

11 上野, *op. cit.*

12 日本青年団協議会『地域青年運動50年史—つながりの再生と創造—』日本青年団協議会、2001、日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』財団法人日本青年館、1971 他

- 13 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史』国土社, 1960
- 14 上野, *op. cit.*, pp.114-115
- 15 小川新田は小川村が中心となって開墾した村だが, 他の5か村はそれぞれ開拓の際に中心となった村が異なる。鈴木新田は貫井村(現小金井市), 野中新田は上谷保村(現国立市), 大沼田新田は大岱村(現東村山市), 回田神社は廻り田村(現東村山市)の人間が中心となって開墾している。
- 16 『小平市史 近現代編』には, 武蔵野新田意識について“劣悪な環境のなかで開発した武蔵野新田で, 幕府からの補助金なしには生産や生活は成り立たないため, これまで養料金(武蔵野新田に下賜された補助金)の受給を受けてきており, 新たな負担を負うことは不可能である”という主張であり, “税の減額や負担回避, 保護を勝ち取るなかで定着してきた自己認識, 自画像であった”と言及されている。
- 17 蕪山県では社会制度について, 政府に米や金を上納するのではなく, 凶荒への予防のため備えておくことだと説明し, 各村が米穀を貯蓄しておき, 県がそれを指導するという形式をとった。一方で品川県では県下で一律の基準を設け, 割り当てられた穀物を村ではなく県が一括して管理し, 金納としたことで, 事実上の増税と認識されたため, 大規模な反対運動が起こった。(『小平市史』pp.30-31)
- 18 田中克佳・船田元“戦前日本の青年団史研究”『慶応義塾大学大学院社会学研究紀要』19号, 1979, pp.35-41
- 19 小平町誌編纂委員会編『小平町誌』小平町役場, 1959, p.1198
- 20 佐藤, *op. cit.*, 1970, p.7
- 21 小平市史編さん委員会編『小平市史 近現代編』小平市, 2013, p.127
- 22 *Ibid.*, p.81
- 23 *Ibid.*, pp.144-146
- 24 *Ibid.*, p.169
- 25 *Ibid.*, p.169
- 26 木村直恵『<青年>の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社, 1998, p.14
- 27 *Ibid.*
- 28 小平市史編さん委員会編(2013), *op. cit.*, p.198
- 29 小平市史編さん委員会編『小平市史料集 近現代編第五集 小平の近現代基礎史料』小平市企画制作部, 2012, p.81
- 30 *Ibid.*, p.81
- 31 小平市史編さん委員会編(2013), *op. cit.*, p.169
- 32 *Ibid.*, p.197
- 33 *Ibid.*, pp.198-199
- 34 小平市中央図書館資料室『小平市教育史資料集第六集 大正編』小平市中央図書館, 1989a, p.190
- 35 日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』財団法人日本青年館, 1971, p.8
- 36 *Ibid.*
- 37 小平市中央図書館資料室(1989a), *op. cit.*, p.185
- 38 *Ibid.*, p.193
- 39 小平市史編さん委員会編(2013), *op. cit.*, p.259
- 40 田代武博“第一次大戦後の青年団支部組織化—佐賀県藤津郡塩田部の場合—”『日本教育史研究』第20号, 2001, pp.59-81
- 41 小平市中央図書館資料室(1989a), *op. cit.*, p.193
- 42 小平市史編さん委員会編(2013), *op. cit.*, p.262
- 43 上野, *op. cit.*, pp.114-115
- 44 田中次雄“青年訓練所時代のことなど”<小平ふるさと物語部会編『小平ふるさと物語(一)』小平郷土研究会, 2003>
- 45 野中豊“野中新田の青年団”<小平ふるさと物語部会編『小平ふるさと物語(二)』小平郷土研究会, 2005>
- 46 田中, *op. cit.*, pp.33-43
- 47 田代, *op. cit.*, p.60
- 48 小平市中央図書館『小平村青年団第四分団文書全(複写) 附 大久保家文書』小平市立図書館, 1990
- 49 *Ibid.*, p.74
- 50 *Ibid.*, p.75
- 51 *Ibid.*, p.74
- 52 *Ibid.*, p.75
- 53 田代, *op. cit.*
- 54 田中, *op. cit.*, p.38
- 55 野中, *op. cit.*, p.100
- 56 小平市中央図書館, *op. cit.*
- 57 小平市教育委員会『小平の社会教育』小平市教育委員会, 1969, p.2
- 58 郷土こだいら編集委員会編『郷土こだいら』小平市教育委員会, 1967, p.206
- 59 *Ibid.*
- 60 小平市史編さん委員会編(2013), *op. cit.*, p.432
- 61 *Ibid.*, p.435
- 62 小平市史編さん委員会編『小平市史料集 近現代編第三集 小平市関連新聞記事集 下巻』小平市企画制作部, 2011b, p.688

- 
- 63 郷土こだいら編集委員会編, *op. cit.*, p.228
- 64 田代, *op. cit.*, p.72
- 65 野中, *op. cit.*, pp.100-101
- 66 小平市史編さん委員会編 (2013) , *op. cit.*, p.322
- 67 小平町誌編纂委員会編, *op. cit.*, p.1198
- 68 小平市中央図書館資料室 (1989b) , *op. cit.*, 1970, p.249
- 69 野中, *op. cit.*, p.101
- 70 小平市史編さん委員会編 (2011b) , *op. cit.*, p.633
- 71 *Ibid.*
- 72 小平市史編さん委員会編 (2013) , *op. cit.*, p.460
- 73 小平市中央図書館資料室『小平市教育史資料集 第二十四集 昭和編 18』小平市中央図書館, 1991, p.9
- 74 *Ibid.*
- 75 小平市公民館『青年の集団活動と公民館－小平市青年実態調査報告－』小平市公民館, 1969, p.1
- 76 小平町誌編纂委員会編, *op. cit.*, p.1198
- 77 小平市中央図書館資料室 (1991) , *op. cit.*, p.1
- 78 *Ibid.*, pp.9-10
- 79 小平市史編さん委員会編『小平市史料集 近現代編第四集 小平市の市民生活』小平市企画制作部, 2011b, p.240
- 80 小平市青年学級生連絡会・小平市公民館『小平市青年学級生記念文集 ともしび 6号』小平市公民館, 1964, p.2
- 81 小平市中央図書館資料室 (1991) , *op. cit.*, p.9
- 82 小平市教育委員会『小平の社会教育 一過去10年の公民館事業のあゆみ－』小平市教育委員会, 1970, pp.69-78
- 83 小平市史編さん委員会編 (2013) , *op. cit.*, p.560
- 84 小平市中央図書館資料室 (1991) , *op. cit.*, p.10
- 85 小平市史編さん委員会編 (2013) , *op. cit.*, p.560
- 86 小平市中央図書館資料室 (1991) , *op. cit.*, p.9
- 87 小平市公民館, *op. cit.*, p.110
- 88 高木重治“高度成長期の農村青年団における学習活動の展開”『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊, 2008, pp.309-319
- 89 小平市公民館, *op. cit.*
- 90 *Ibid.*
- 91 小平町誌編纂委員会編, *op. cit.*, p.1198
- 92 日本青年団協議会編, *op. cit.*
- 93 上野, *op. cit.*

# **A Study on the Role and Transition of Youth Organization in Kodaira City:**

## **Focusing mainly on the Inter-war and Early Post-war Era**

Hiroshi OYAMA<sup>†</sup>

<sup>†</sup>Doctor Course, Graduate School of Education, the University of Tokyo

The purpose of this study is to examine the transition of involvement between youth organization and local community. The result of the case study of Kodaira city verifies the process of transition of youth organization: youth organization that existed as embedded in the context of local community were altered to the educational group for the purpose of fellow making. This result suggest that educational significance of youth organization is changed by the involvement with local community.

Keyword: Youth organization, *Seinen-dan*, *Seinen-gakkyu*, community